

スマホとの連携や小型化で進化する補聴器

◆補聴器の普及率が低い日本

6月6日は補聴器の日とされている。聴覚の衰えは20代から始まり、75歳以上の約半数が加齢性難聴に悩んでいるという。最近の研究により、難聴が認知症のリスクを高めることもわかってきた。しかし日本では補聴器の普及が遅れている。

日本補聴器工業会によると、難聴者で補聴器を使っている割合は、英国42%、ドイツ35%、フランス34%、米国30%に対し、日本は14%と低い。

普及が進まない要因として、補聴器の販売環境と情報提供の不足、加えて補聴器への理解不足を挙げることができる。補聴器は「認定補聴器技能者」のいる専門店で購入することが望ましく、購入後の適切な調整と「慣れること」が重要だ。

また価格の高さも課題で片耳で3万円前後～数十万円する製品が多いが、日本では保険が使えず、身体障害者の基準に適合した場合のみ1割負担で購入できる。

◆デザイン、機能とも進化している補聴器

かつては、補聴器をつけると雑音までひろってしまい、かえって聞きづらいという不満の声もあったが、音声のデジタル処理により音量や音質の変更が可能になった。ハウリング音を抑え、個人の生活環境に合った調整も可能になっている。

また最近の補聴器はデザイン的にも進化している。2018年のグッドデザイン賞を受賞したGNヒアリングジャパン（本社はデンマーク）の補聴器は、小さくて目立たず、ファッション性もある。さらに高



専用アプリで遠隔サポートも可能に
写真提供：GNヒアリングジャパン

度な音声処理能力を備え、スマホとネットにつながり、専門家による遠隔サポートを受けられ、置き忘れた補聴器をGPS機能で探すことも可能だ。国内メーカー、リオンの最新機種も、デジタル処理時間を短縮し、より自然な音に近づけ、補聴器本体での音量操作が難しいという人は、スマホアプリを使って調整することができる。

超高齢社会になり難聴に悩む人は確実に増えていく。まずは補聴器の正しい情報提供と公的補助等により普及率を高めていくことが求められる。 【秋元真理子】